



中東政治経済ニュース

©1987. 12. 25・No.350

中東コラム

私とイスラム世界

中嶋嶺雄

私の専門は中国を中心とする東アジアの国際関係や地域研究であり、いわゆる「儒教文化圏」を主たる研究対象領域としている。そのような私ではあっても、アメリカやソ連そしてヨーロッパやオセアニアなどにはしばしば出かけたり、長期に滞在したりという経験が多いのに、イスラム世界だけはまったくの素通りである。中東研究やイスラム研究がますます重要になってきている今日、「儒教文化圏」と「回教文化圏」の比較という大きな世界史的関心をもつべきであろうが、依然として私のイスラム体験は乏しい。中国で国民の食堂を探訪したり、ソ連領中央アジアでイスラム教徒の熱心な信仰ぶりに接したり、ホメイニ革命前のイランに立ち寄ったり、パキスタン領インダス川沿いのイスラム遺跡を訪れたり、クアラルンプールのモスクをしばしば尋ねたり、といった程度のイスラム体験しか私はもたない。強弁すれば、この春まで一年間、敬虔なイスラム教徒のインドネシアの留学生を

わが家にホームステイで受け入れ、彼を通じて日常的にイスラム異文化を体験したといった程度である。

だから、私のイスラム世界像は、きわめて皮相で、通俗的なエキゾチズムや西欧流のオリエンタリズムに毒されたものだといえるかもしれない。

だが、このように私がイスラム世界を避けているのはなぜだろうか、としばしば考えることはある。それを正直に述べれば、イスラム世界の扉を開くのがなんとなく怖いからで、そこだけは私の人生でも深く触れないでおこう、といった気持があるからである。そして、イスラム世界の扉を私自身が開いたとたんに、イスラム世界の強烈な吸引力に圧倒されて、自分が中国や東アジアを専攻したことを悔むのではないかと恐れるからである。

(東京外国語大学教授 国際関係論)